

幼稚園における人形劇の人形のつくりについての史的考察

東京家政大家政 ○山内昭道 著藤尚子

目的 幼稚園の中で、保育者自身によって演ぜられる人形劇は、東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大）附属幼稚園において、教授であり、幼稚園主事であった倉橋惣三（1882～1955）の発案によって演じられた大正12年から始まり、幼稚園での活動として広がった。その後、内山憲尚、山内勇仙、松葉重庸などによって普及された。なぜ幼稚園において人形劇が演ぜられたのか、どのように普及していったのかについては、協同研究者藤が検討しつつある。ここでは、それぞれによって創作された人形のつくりから幼稚園における人形劇についての考え方を考察するのが、本研究の目的である。

方法 大正12年から昭和20年までの人形のつくり

1. 倉橋惣三の指導した人形のつくり、文献と複現
2. 内山憲尚（1899～1979・聖美幼稚園長）の自作した人形の実物と文献
3. 山内勇仙（1893～1959・亀戸幼稚園長）の自作した人形の实物と文献
4. 松葉重庸（1905～・児童文化実践研究者）の人形のつくり、文献

結果 1. 附幼の人形はマッチ箱などの空箱、卵殻、二枚の布を縫い合せ綿をつめるなどして頭を作り、胴は2枚の布を縫い合せた保育者がたやすく出来るものであった。

2. 内山の人形は、主に新聞紙の細片を煮て作った紙粘土で頭を作り、胴着の上に衣裳を着せた本格的な人形が中心であった。人形劇団を創設したことであり、写実的であった。

3. 松葉は主に紙を芯として和紙を貼るなど、いろいろな人形を工夫した。

4. 山内は布と画用紙での人形で、保育者が先ず容易に作れるものという考えであった。